

大綱を引っ張り、地域も引っ張る!

みやき町商工会青年部

(糸山新一郎・轟木一弘・西原賢一)



新旧実行委員に聞く
県境フェスティバルの
これまでとこれから!
—みやき町商工会青年部—

(編集注:このインタビューは、昨年2011年の県境フェスティバル終了後に行いました)
—まずは県境フェスティバルの立ち上げの頃の話からお聞かせください。

6年前(2009年)に久留米南商工会青年部の方からお誘いがあったのがきっかけです。その前(みやき町に合併する前の三根町時代)からも、久留米南商工会青年部の方々のつながりは個人レベルではあったのですが、ちょうど天建寺橋が竣工して10年という節目で、それを記念して『一緒に何かをしよう!』というオフアワーが来たのはその時が初めてでした。



新旧の県境フェスタ実行委員の皆さん
(轟木さん、西原さん、糸山さん)

—立ち上げ時の苦労話やエピソードは?—
初めはとにかく苦労の連続でした。まずメインイベントとしていた天建寺橋での綱引き自体が、橋の使用許可が警察から出なかった為、開催できませんでした。
なので代わりに別の場所での綱引き大会という形をとったのですが、それも悪天候の為にうまくいかない。
また開催時期も年度末の3月という、各部門が多忙な時期だったせいで、運営メンバーも集まらなかったというのも問題の要因だったと思います。
—初年度はそんな結果だったにもかかわらず、それでもまた次やろう!、となったのはどうしてでしょうか?—
あの第1回目の結果を目の当たりにして、逆に「このままじゃ絶対に終われない」という気持ちになったからです。反省点として先ず挙げられたのが、準



今ではメディアも注目する一大イベントだが、そこに至るには苦労の連続



安全にイベントが行われるよう、実行委員の皆さんの力が欠かせない

備期間そのものが短かったこと、そして先ほども言った、綱引きに使う天建寺橋の使用許可、これが簡単にとれるだろうと勝手に考えていたことでした。
とにかく天建寺橋の使用許可を得るための交渉は想像以上にハードでした。まず開催会場が久留米側の河川敷なので、メインの交渉は久留米の警察署と行うのですが、警察側の基本スタンスは「橋の通行止はダメ」です。
イベントの意義をどんなにこちらが説明しても、警察の立場としては「安全が確認できない以上、使用許可はあり得ない」の一点張りでした。
また警察以外にも国交省久留米支所や福岡・佐賀両県の土木事務所、地元漁協など、交渉相手が多い、そしてその相手も各々言い分が異なる、その調整も本当に大変でした。
例えば、警察からは「橋から人が落ちたらどうする?対策をしないとだめだ」安全にイベントが行われるよう、実行委員の皆さんの力が欠かせない
久留米市にはもう一つ、水の祭典という花火大会があるのですが、それもこれまで大きな事故を起こしていないという長年の実績があるからこそやっと開催できているというのが実情で、ましてや新しく開催しようとしているイベントに対して後ろ向きになる姿勢も理解できないわけではないですが、それにしても「なんでここまで非協力的なんだ...」とくじけそうになったのも正直なところではあります。
—そんな難しい交渉相手の姿勢を変えた要因はなんだったのでしょうか?—
今振り返ってみると、大きな決定打、というのは特に無かったような気がしますが、それこそ、何となく警察へ足を運



イレギュラーはつきもの、普段からのチームワークを活かして対応する

んで、一番こだわっていた安全に対する要求事項を一つ一つクリアしていくという、そんな地道な交渉の繰り返し、結果として「2時間だけ」という縛りはありましたが、橋の使用許可を取れたことにつながったと思います。

あえて言うなら、「俺たちのやろうとしていることは必ず皆に喜ばれる、だから絶対にあきらめない」そう信じつづけた「情熱と意地」、それが要因だったのかもかもしれません。

そして2回目の開催以降も、そんな立ち上げ時の苦労を忘れず、「継続こそが一番のパワーだ」という思いを受け継いで頑張っています。いったん止めたらすべて終わり、また一から、になるので――予算の面でも苦勞されているのではないのでしょうか？



大綱引きだけでなく、様々な催しものがあり誰もが楽しむことができる

1回目の開催時は、規模も小さかったのですが、市町からの補助金はゼロ、協賛金だけで運営しました。そしてこれも継続開催する事で、少しずつ市町からの補助金を頂けるようになり、また協賛金自体も増えていきました。でも警備員の配置などの支出も増え、余裕は全くありません。ですから通常の準備作業に加えて、協賛金集めも大切な仕事の一つです。でもこれも、開催を重ねていくと、『今年ももうそんな時期やね、来るのを待ったよ！』などと言われることも増えてきました。もちろん金銭面でありがたいのですが、そんな声を聴くと本当にうれしく思い、また励みになります。少しずつ「わが町の祭り」と認知してもらってきているんだなあ、とても実感する瞬間です。

―次に、共催のパートナーである久留米南



轟木前委員長から西原新副委員長へバトタッチ、祭りへの思いもしっかりと！

地元の人が喜んでくれるからこそ、ずっと続けていきたい！

商工会青年部との連携についてお聞かせください。どれくらいの頻度で交流されているのでしょうか？

冒頭でお話ししましたが、当初は個人レベルでの交流しかなく、青年部レベルでの交流自体はそれほど頻繁にはありませんでした。なのでいざ顔合わせをしても、当初はどうしてもお互いよそよそしい、そんな感じでした。

でもここまで共催を続けていけば自然と密な関係になり、仕事上やプライベートでも普通に、それこそ佐賀の青年部同士と同じような交流が続いています。

イベント開催時も、特にどちらが主導権を握る、というような関係の差はありません。全くの対等な立場で意見を言い合います。そして協力し合っています。

―イベントの規模、今はどれくらいですか？

具体的な数字はわかりませんが、自分たちの実感としてはかなり大きなところまで来ていると思います。それは素直に嬉しいことなのですが、その一方で運営面から見れば、いろんな制限がある中で各部署の負担も大きくなり、ぎりぎりのところまできつ々あるのも実態です。今直面している一番の問題はそこです。

イベントを大きくして集客を増やすこと、これは主催者として当然の願いです。また実際そうしてきました。『ギネスに挑戦！』と銘打って行った今年もまさにそれが目的でした。

でも部員への負担を考えると、イベント縮小の検討も真剣にしないといけないのでは？、そういう葛藤も実はあるんです。先ほど言った立ち上げの経緯を知る人間

としてはとても勇気のいることですが。なので、裏方として運営に携わっている青年部員にもせつかくの祭りを楽しんでもらいたい、そうではなくてこの先ずっと続けるのは難しいんじゃないか、そう思っています。朝から晩までずっと運営側で汗かくのではなく、せめて家族が顔を出しに来たときくらいは、小一時間くらい運営を抜けて家族だんらんのひと時を作りたい、それが来年（注：実際は今年）の大きな課題です。運営に携わる僕らが楽しめるように、結局は参加者の皆さんにも楽しんでもらえないんじゃないかと思っています！

―最後に、このイベントに真剣な姿勢で取り組んでいる青年部員に対してコメントを。

『感謝』その言葉しかありません。そしてこのようなイベントがあるからこそ、部員同士のつながりが強まり、きっと自分の仕事にも活かせるだろうし、そして最終的には青年部という組織の強化につながるんじゃないかと考えています。その事をわかってもらえたら、本当にうれしいですね。

―今日は本当にありがとうございました。来年のイベントも大いに盛り上がることを期待しています！



第7回県境フェスティバル
開催日時：2015年5月31日（日）
朝9時～夕方17時
場所：天建寺橋河川敷特設会